

ヒトデ型教会のススメ —現代日本教会の閉塞感を打破する試みとして—

福田充男

2002年7月に、当時の日本基督教団副議長の山北宣久氏が、ある研修会で次のように述べた。「日本基督教団は現在、約200の無牧教会を持ち、このまま伝道しない状況が続くと10年後には500の教会が無牧となる。」また、「現在教団では60歳以上の信徒が全信徒の50パーセントを超え、教区によっては70%を越えている。」とも語った¹。クリスチャン新聞2007年10月7日号の統計を見ると、福音派でも程度の差こそあれ、高齢化・少子化・個人主義化などの社会的要因、さらには宣教の停滞・活力の低下・内向き・形式化などの内的要因により、諸教会が閉塞感を深めていることがわかる²。

閉塞感の原因を、祈りの不足、信仰による積極思考の欠落、聖書の学びの不徹底などの、いわば「霊的」要因に帰する考え方がある一方、教会観の軽視が問題だとして、組織論として論じる人たちもいる。どちらももつともな根拠があると思われるが、本稿では、オリ・ブラフマンとロッド・A・ベツ

¹ リバイバル新聞2002年8月4日号

² クリスチャン新聞2007年10月7日号参照

クストローム著『ヒトデはクモよりなぜ強い：21世紀はリーダーなき組織が勝つ』³の分散型組織論を援用して、後者の組織論の視点で、ステパノの迫害以降の初代教会を分析し、そこから、現代日本教会の閉塞感を克服するための糸口を模索する。

世俗の経営組織論を援用するときには、その理論の前提となっている非聖書的な価値観や仮定に対して、批判的に検証する必要がある。さもないと、教会成長論の否定的影響の轍を踏むことになりかねない⁴。しかし、その検証は、別の機会に取り組むことにする。本論の目的は、現代日本の教会を分析するための1つの包括的な視点を提供することである。まず、しっかりした構造や指導者、形式的な機構を欠く分散型組織が、集権型組織に比して、いかに柔軟性とパワーを持つかを、スペイン軍の侵略に対するアパッチ族の抵抗の様子から解説し、それが初代教会の爆発的な福音伝搬の要因と通底していることを示す。その上で、集権型教会論から分散型教会観へのパラダイム転換が、日本宣教の新たな地平を拓く可能性について論じる。

1. スペイン軍とアパッチ族

『ヒトデはクモよりなぜ強い：21世紀はリーダーなき組織が勝つ』では、1521年に、スペイン軍を率いた探検家、エルナン・コルテスが、キリストの誕生よりも何世紀も前にその文明の起源を持つアステカ帝国を2年で崩壊させたことが描写されている。当時のアステカの首都には、立派な街道が繋がり、複雑に入り組んだ送水路が設置され、壮大な寺院やピラミッドが建立さ

³ 日経BP社、2007年。原著は、Ori Brafman and Rod A. Beckstrom, *The Starfish and the Spider: The Unstoppable Power of Leaderless Organization*. (New York: Portfolio, 2006)

⁴ 西岡義行は、「教会成長論再考」『宣教学リーディングス：日本文化とキリスト教』(RACネットワーク(文脈化研究会)、関西ミッションリサーチセンター、東京ミッション研究所、2002年)349-368頁で、教会成長論は、教会のあり方を宣教地における土着文化とのかかわりで模索したものだが、その理論的前提には、啓蒙主義やプラグマティズムなどの哲学の影響があると指摘している。

れていた。1500万の住民と独自の言語、先進的な暦と中央集権制を持つ文明が繁栄していた。しかし、コルテスの策謀と兵糧攻めにより、王は殺され、首都に住む24万の住民が80日で飢え死にし、2年以内にアステカ帝国は完全に崩壊した。

南米大陸を手中に収め、誰にも止められない勢力となっていたスペイン軍を破ったのは、一見原始的な部族と思われるアパッチ族だった。スペイン人は彼らに農耕を教え、カトリック教徒の農民に仕立て上げようとした。しかし、大多数のアパッチ族は抵抗し、スペイン人の財産と見ればなんでも強奪し、大々的な反撃に出た。17世紀の終わりまでに、彼らはスペイン軍の支配権を奪い、メキシコ北部を掌握し、その後2世紀にわたって、スペイン軍を撃退し続けた。

その秘密は、政治権力を分散して、なるべく中央集権を避けていたからだ。彼らにはヒエラルキーも、意思決定の物理的な場所もなく、誰もが自分自身で意思決定するという社会を構成していた。たとえば、ある場所で誰かがスペイン人入植地への襲撃を思いつくと、別の場所で計画が立てられ、そしてまた別の土地で実行に移される。アパッチ族がどこから現われるか、誰にもわからない。重要な決定が下される決まった場所がない。別の言い方をすれば、誰もが、あらゆる場所で、それぞれ重要な決断を下していたのである。

アパッチ族には、他の部族のような首長はなく、ナンタンと呼ばれる精神的・文化的指導者がいた。ナンタンは行動で規範を示すだけで、他者に何かを強制する権限は持たなかった。「史上最も有名なナンタンの一人が、アメリカ人を相手に何十年も部族を守ったジェロニモだった。ジェロニモは軍隊の指揮をとったわけではないが、彼が一人で戦い始めると、周囲の者もついていった。『ジェロニモが武器を手にとって戦うのなら、たぶん、そうするのがいいだろう。ジェロニモは今まで間違ったことがないから、今度も、彼と一緒に戦うのがいいだろう』というわけだ。ジェロニモについて行きたければ行けばいい。行きたくなければ、行かなくていい。一人ひとりに権限があるので、それぞれがやりたいようにする。『するべきだ』という言葉はアパッチ族の原語に存在しない。『強制する』という概念は、彼らには理解しがたい

ものだ」⁵。

スペイン軍は、アステカの王、モンテスマ2世にしたように、アパッチ族のナンタンたちを排除しようとした。ところが、アパッチ族には社会全体を守る唯一無二の人物は存在しない。ナンタンをひとり殺すと、また別のナンタンが登場した。そればかりか、アパッチ族は攻撃されてますます強くなった。攻撃されるごとに、アパッチ族はさらに細かく権限を分散し、さらに征服しにくい組織に変化した。スペイン軍が村を破壊したら、アパッチ族は古い家屋を捨てて遊牧生活を始めた。こうして、アパッチ族はさらに開かれた状態になり、さらに捕まえにくいものとなった。

II. ステパノの迫害後の初代教会

分権型の組織が攻撃を受けて、それまで以上に開かれた状態になり、権限をそれまで以上に分散させ、つぶしにくい組織に強化されていくという話は、新約聖書にも見られる。復活の主イエスは、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒1:8)と弟子たちに語られた。エルサレムで始まった証言の働きが、地理的・文化的・民族的境界を超えて、まずは近接地域に拡大し、さらに地中海世界全体、そして、最終的に「地の果て」に到達することが、イエスが思い描いておられたことであった。

ところが、弟子たちはなかなかエルサレムから出て行かなかった。使徒たちの関心事は、神の民を戦略的に派遣することではなく、共同体内部の食料分配に関する争い事の解決と、急激に増加した信徒たちの牧会的ニーズを満たすことに向けられていた(使徒6:1-6参照)。そうこうしているうちに、迫害が起こった。ステパノの殉教の日、「エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らさ

⁵ オリ・ブラフマンとロッド・A・ベックストローム『ヒトデはクモよりなぜ強い：21世紀はリーダーなき組織が勝つ』20頁

れた」(使徒8:1)。そして、「散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた」(使徒8:4)。初代教会の場合も、アパッチ族と同様、分散型組織である教会に対する攻撃は、さらなる分散を引き起こし、迫害者にとってさらに管理しにくい体質に変貌していったのである。

迫害の後、エルサレムに留まっていた使徒たちに、遠くアンテオケから知らせが入った。迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロスまでも進んで行って福音を伝えたが、アンテオケに達したときに、ギリシャ人にも福音を伝えるようになった。異邦人宣教の拠点となるアンテオケ教会は、使徒たちが創設したのではなかった。財産を没収され所払いにされた名も無き人たちによって開拓されたのである。「遣わされた者」という名称を与えられた使徒たちが、分散の使命を脇において、1つの所に留まり続けた結果、神は迫害を用いて、彼ら以外の無数の「遣わされた者」たちを起こされたと考えることができよう。

しかし、別の角度から見ると、エルサレムの信者たちの群れに分散のDNAを与えたのは、他ならぬ使徒たちだったとも言える。使徒たちを育成したイエスご自身は、父によって遣わされた方だった。そのイエスが、今度は十二使徒を2人1組(計6組)に編成しなおして、弟子派遣の第1段階として、イスラエルの町々に送り出された。派遣の第2段階は、ルカ10章に記されている。ここで、12人のほかに72人(あるいは70人)の弟子が登場する。この72人の新しい弟子たちは、2人1組に分けられた6組の十二弟子が、各組12人ずつ育てることによって起こされたと考えられる(12人×6組=72人)。イエスと十二使徒たちは、72人を2人1組に再編成し、計36チーム派遣した(ルカ10:1)。ここでも、1チームが遣わされた所で、それぞれ12人の弟子を育成したと考えると、復活のイエスに会った500人以上の人たち(1コリント15:6参照)は、72人と、72人によって育成された人たちだったと考えることができる(72人+12人×36チーム>500人)。500人、つまり2人1組で構成される250組の弟子育成チームがすでに存在していたからこそ、ペンテコステの日に3,000人がバプテスマを受けても、彼らを育成す

ることができたと考えられる(12人×250チーム=3,000人)⁶。このように、弟子たちはさらに広範囲に分散することを通して、力を得るようになった。そのきっかけは、多くの場合、権限分散型の組織から脅威を受けた中央集権型の組織からの攻撃だった。

III. ヒトデ型組織の5つの足

ブラフマンとベックストロームは、アステカ帝国のような集権型の組織をクモに、アパッチ族のような分散型の組織をヒトデにたとえている。頭を切り落とされたら、クモは死ぬ。アステカ帝国はクモにたとえられる集権型組織だったので、ヒエラルキーのトップにいる王が殺されることで、帝国自体が急速に壊滅に向かった。ところが、ヒトデの場合は、頭がない。中央で命令を発する中枢器官がないのだ。主な器官は、それぞれの腕の部分に複製されて広がっている。

「ヒトデを半分に切り離すと、驚くべきことが起きる。二つに割られて死ぬどころか、ヒトデが二つになるのだ。ヒトデには信じられないような特性があり、腕を切り落とすと、ほとんどの場合、そこに新しい腕が生えてくる。リンクアという腕の長いヒトデのように、種類によっては、切り落とした腕が新しいヒトデになることもある。ヒトデにこんな魔法のような再生ができるのは、ヒトデが神経回路網、つまり細胞のネットワークでできているからだ。クモのような頭を持たないヒトデは、分権型のネットワークとして機能する。つまり、ヒトデが動こうと思ったら、腕のうちの一本が、他の腕に、「動こうよ」と説得しなければならない。一本の腕が動き始めると、まだ完全に解明されていない事態が起きて、他の腕も「協力」して動き始める。脳が「進め」「止まれ」と命令するわけではない」⁷。

ブラフマンとベックストロームは、現代の分散型組織を例示しつつ、分権

⁶ David Lim, *Towards a Radical Contextualization Paradigm in Evangelizing Buddhists*. (Pasadena, CA: William Carey Library, 2003) pp. 75-76 参照

⁷ オリ・ブラフマンとロッド・A・ベックストローム『ヒトデはクモよりなぜ強い：21世紀はリーダーなき組織が勝つ』34-35頁

型組織が突然大成功を取めるときの条件について述べている⁸。分権型組織は5本足で立つ動物のようなもので、それぞれの足がすべていっしょに動き出すことが必要だ。

1) サークル

1 本目の足は、サークルである。アパッチ族は、小さく、ヒエラルキーのないグループをつくり、アメリカ南西部じゅうに散らばって住んでいた。独自の習慣と規範を持つ、独立した自治能力のあるグループをサークルと呼ぶ。

初代教会の場合は、迫害を避けて、家で隠れて集まっていた無数のグループがサークルに相当する。サークルは個人の家で集まることのできる人数、つまりほぼ20人以下に限定されていたと思われる⁹。パウロはコリントの諸教会に対して、「あなたがたが集まるときには、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい」(Iコリント 14:26)と勧めている。彼らは互いに教え、戒め、罪を告白し、励まし、祈り、生活の中で助け合う「フラットでインタラクティブな共同体」だった。彼らの規範は、キリストが愛されたように互いに愛しあうことだった。また、ヨハネが、「あなたがたのぼあいは、キリストから受けた注ぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません」(Iヨハネ 2:27)と述べているように、各教会はキリストと直接的に結びつく自治集団だった。

2) 触媒

ブラフマンとベックストロームが述べる2本目の足は、触媒である。触媒はサークルを創設し、そのあとは身を引いて、表舞台から消えてしまう人物だ。アパッチ族で言うとナンタンのことである。ナンタンは自分が模範を示

⁸ 前掲書、90-115頁

⁹ ロバート・バンクスは、「3世紀になるまで、キリスト教の集会のための専用の建物が建設されたという形跡は見つからない」と指摘している。Robert Banks, *Paul's Idea of Community* (Peabody, MA: Hendrickson, 1994) p.41.

すことでアパッチ族を率いたが、考えをほかの者に押し付けることはなかった。触媒はアイデアを発展させ、他の人たちとそれを共有し、やる気を起こさせ、模範を示すことでサークルを導き、仕事を終えたら、集団の構造が集権的になる前に、権限を委譲して去って行く。

初代教会における触媒は使徒と預言者である。教会開拓者と言い換えてもよい。パウロは現代のように交通が便利ではなかった時代に、何とかローマに行こうとした。しかし、彼にとってローマが終着点ではなく、そこを通過してイスパニアに向かうことが旅の目的だった。彼がもしイスパニアまで到達できたなら、もっと遠くに行こうとしたに違いない。使徒の働きの中には、さらに先に遣わされていくために、「現在の働き場を去る」ということが含まれていた。

パウロがエベソの長老たちを集めてした告別説教には、彼の触媒としての考え方が現われている(使徒 20:17-38)。パウロが去った後、群れを荒らす凶暴な狼が入り込んでくるだけでなく、リーダーたちの間からも邪説を唱えて自分たちの陣営に人々を引っ張り込もうとする者が出てくることが予想された。その予防策として彼が話したことは、信条の確定や神学校の創設ではなかった。彼の勧めは、第一に、パウロ自身の生き様、そしてその象徴である涙を思い出すこと。第二に、神と恵みの言葉に直接結びつくことだった。使徒は支配しようせず、生き様を見せることによって模範を示した。また、神が御言葉を通して人々を直接守り育てられるという恵みの働きに信頼を寄せたのである。支配して留まり続ける集権型組織のリーダーのあり方とは違い、使徒はリーダーとしての責任をサークルにゆずり渡して、次の任地に向かって行った。

3) イデオロギー (行動の規範となる信念)

分権型の組織をまとめる接着剤の役割を果たすのは「イデオロギー」である。アパッチ族はみな、古来の土地は自分たちのものであり、そこで自治権を持つべきだという信念を持っていた。彼らはこの自主独立の信念のために戦い、自らを犠牲にする覚悟だった。

初代教会のイデオロギーは何かという質問には、多様な答えが想定される。

しかし、教会が分散型組織だという視点からまとめるなら、「行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」（マタイ 28：19）という大宣教命令に要約できる。人はしばしば自己保全のために集まろうとするが、神は人間が地に満ちて、神の支配が行き渡るために（創世記 1：28）、人々を「地の全面に散らされた。」（創世記 11：8）神のビジョンは、「水が海をおおうように、地は、主の栄光を知ることによって満たされる」（ハバクク 2：14）ことだ。イエスの弟子たちは、聖霊の力を受けて、「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしくキリストの証人となる」（使徒 1：8）という使命を帯びていた。御国の福音が、「全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ」（マタイ 24：14）る前に、終わりの日が来ることはない。

このように分散して派遣され、弟子が増殖して、地に神の支配が証しされるための動機付けは、イエスの「スプランクニゾマイ」である。「心の底から溢れてくる深いあわれみ」を表現する言葉だ。放蕩息子に走り寄り父の心（ルカ 15：20）、強盗に襲われた人を助けたサマリア人の気持ち（ルカ 10：33）、多額の借金を棒引きにした王の心（マタイ 18：27）、病人をあわれむイエスの思い（マタイ 14：14）を表現するために用いられた言葉である。イエスは十二使徒を派遣なさる前に「群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかかわるに思われた」（マタイ 9：36）。人々に対するイエスのあわれみに共振して、弟子たちは真の羊飼いを紹介するために、危険を顧みず 2 人組で出かけて行ったのである。初代教会のイデオロギーは、神のあわれみに動機付けられて派遣され、神の支配に身をかがめる人たちを地に満たすことだった、と言えよう。

4) 既存のネットワーク

ブラフマンとベックストロームは、分権型組織が急速に拡大するための 4 本目の足は、既存のネットワークが用いられることだと指摘している。しかし、彼らはアパッチ族の例を挙げていない。アパッチ族は勢力を拡大しようとしたのではなく、自主独立を守るために、後から侵入してきた外敵に対して抵抗した例だからである。その代わりに、著者たちは、奴隷解放運動がクエーカーのネットワークの土台の上に展開したことや、アルコホリックス・ア

ノニマスがオックスフォードグループを基礎にしたこと、さらには、スカイプ、イーミュール、クレイグズリストなどが、インターネット上に誕生したことを紹介している。

初代教会の急成長のために貢献した既存のネットワークは、近親一般を含む大家族だった。ルカの福音書 10 章の弟子たちの派遣の記事では、弟子たちが入った家に平安の子がいるかどうか町への救いに直結すると説かれている。平安の子は、福音に対して心を開いている家長だったと思われる。イスラエルでは、エルサレムの神殿で礼拝するのは年に 3 度の大祭のときだけで、庶民の日常的な宗教生活は、各家の長のリーダーシップによって支えられていた。悪霊から解放されたゲラサの狂人に、「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」（ルカ 8：39）とイエスが命じられたのは、元狂人と彼の証言を聞いた家のメンバーを通して、デカポリス地方に福音がもたらされるためであった。

もう 1 つの既存ネットワークは、離散ユダヤ人のネットワークだった。聖霊がくだった五旬節の日に、弟子たちが他国のことばで話し出したとき、集まってきたエルサレムの住人たちは、驚いて言った。「私たちは、パルテヤ人、メジヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、また滞在中のローマ人たちで、ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国のことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは」（使徒 2：9-11）。パレスチナ以外の中近東各地に居住した離散ユダヤ人は、当時 400 万人いたと言われている。この日洗礼を受け、「家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美」（使徒 2：46、47）する生活を始めたヘレニストたちが、ステパノの迫害の後、ローマ帝国やバルティア王国に散在するユダヤ人居住地を辿って世界宣教を遂行したのである。

5) 推進者

推進者は、触媒が構想したことを、実践的に推し進める人のことだ。ここでも拡大の契機のないアパッチ族は取り上げられていない。ブラフマンとベ

ックストロームは、奴隷解放運動において、「触媒」、つまりまとめ役・つなげ役として機能した創始者のグランビル・シャープが、セールスマンの気質を持つ「推進者」のトーマス・クラークソンと、チームでリーダーシップを発揮したことを描いている。

初代教会の推進者は、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げる」（エペソ 4:12）ために備えられた「キリストのからだ」の5つの機能と考えられる。先に、使徒と預言者が「触媒」だと論じたが、それらに、伝道者、牧師、教師の3つが加わる。伝道者、牧師、教師が「推進者」だというのではなく、使徒と預言者を含むチームが、ある特定の領域において、キリストの働きを推進するための動力となると考えられる。触媒もまた推進者の一部だという意味では、ブラフマンとベックストロームのモデルよりも有機的だと思われる。

使徒は新しい領域に最初に遣わされていて、ムーブメントの土台となる構想や価値観や戦略を提言する。預言者は、多くの場合使徒と同行し、使徒が示した地図の通りに教会が進んでいくための「カーナビ」のような働きをする。預言者を通して、神がご自身の心にある様々な情報を開示される。伝道者は、教会をいつも外向きに、失われた人々が神に立ち返るように働く。牧師は、1人ひとりが神との正しい関係を保つことができるように、また互いに助け合う交わりの中で成長することができるように人々を結びつける。教師は、教会が真理に立ち続けることができるように、規範である聖書から解き明かす。

これらの5つの働きは、「使徒と称する人物」がいると考えるよりも、「使徒という機能」が多様なかたちで教会開拓プロジェクトにおいて発揮される、と考えた方が現実に即している¹⁰。もちろん、常時使徒的な機能を担う人が存在する場合もあるが、教会開拓のプロセスの中で、時に応じ、状況に応じて、それらの機能が多様な形で備えられるのである。たとえば、使徒ヨハネは、派遣されているときには使徒であるが、ローカルチャーチに留まるよう

になると、自分を長老と呼んでいる。5つの働きを、特定の人物と結びつけて固定的に理解することで、自由な聖霊の導きに柔軟に対応できなくなる場合がある。

IV. 現代日本教会への提案

ステパノの迫害以降の初代教会は、ヒトデ型組織の特徴を持っていた。小さくてフラットで生活に根付いた「サークル」が次々と生まれた。模範を示すことで指導し、新しい任地に継続的に派遣されていく使徒や預言者たちが「触媒」として機能していた。失われた人々に対する神のあわれみに共振する人々が、諸国民をキリストの弟子とするという「イデオロギー」に生命をかけた。ムーブメントは、拡大家族と離散ユダヤ人という「既存のネットワーク」を土台として拡大した。そして、働きを実際に推し進める「推進者」として、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師という諸機能を担う人々のチームがあった。

一方、現代の日本の教会は、総じてクモ型である。日本の教会は、サイズは小さいが、メンタリティーは中央集権型・プログラム依存型である。知識と権限が「教職者」に集中していて、主に説教を通して、健全な教理とメンバーの信仰の質を管理する努力がなされる。教会の主な関心事は、教会堂で「教職者」が指導するプログラムに人々を招くことを通して、さらに大きな会堂に、さらに多くの人々が溢れる「さらに強大なクモ型組織」になることである。メンバーは、既存のネットワークから引き離されて、教会の文化に同化するように導かれる傾向がある。そして、教室で真理を明らかにするという教師の機能が土台となっているため、分散して世界に派遣されていくという視点が見過ごされがちだ。その結果、クモの頭である「教職者」と彼らを支えてきた世代の高齢化によって力を失い、社会の功利主義化・個人主義化・ニーズの多様化という変化に柔軟に対応できないで孤立している。

そこで、本項では、クモ型組織である日本の教会が、ヒトデ型組織である初代教会の原則から、何を学ぶことができるかを、ヒトデ型組織の5つの足の分類に添って考察する。

¹⁰ Mike Breen and Walt Kallestad, *A Passionate Life* (Colorado Springs, CO: NexGen, 1995) pp. 135–153 参照

1) 自律的なサークルの回復

イエスは、「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」(マタイ 18:20)と言われた。数人のグループには、触媒や推進者が必ずしも含まれていない、という点から考えると、大きな集団の中でこそ経験する神の恵みがある、と考えることもできる。しかし、他ならぬイエスが「その中にいる」とおっしゃっていることを過小評価してはならない。教会史の中で、百年以上続いたムーブメントとして、モラビア伝道団とメソジスト運動を挙げることができるが、その2つとも、少人数の親しいメンバーが相互に罪を告白するアカウントビリティグループがあった。日本の教会がヒトデ型組織の要素を取り入れる一つの道は、「教職者」が支配しないアカウントビリティグループをリリースすることだと思われる¹¹。

2) ライフスタイルの手本を示す触媒

迫害下の初代教会の時代に、未信者がクリスチャンを生まれて初めて見たのは、たいてい彼らが円形闘技場に引き出されて虐殺される時だった。クリスチャンは殺せば殺すほど増え広がった。それは、彼らの死に様が、未信者に決定的な影響を与えたからだ。自分が殺されようとするときに隣人を思いやり、死を恐れずに神を賛美している姿は、日常生活の中で神とどのような関係を結んで生きたかという清められたライフスタイルの結実である。このように、伝道イベントを開催できない環境の中で、神を愛し隣人を愛するという「生きる道」が伝搬していったのである。神の国の偉大さが、日常生活の中で御言葉に生きる人々の模範によって証しされていくときに、それら

の触媒を通して「キリストに従って生きる道」が、疫病のように広がっていく可能性がある。「集会に来て奉仕しなさい」という内向きの教えではなく、「出て行って生活の場で隣人を愛しなさい」という外向きの模範を示す触媒の登場が求められている。

3) 「地を主の弟子で満たす」というイデオロギー

毎年日本では約90万人の人が死亡している。仮に今日1日で2500人が死亡したとしよう。そのうちの1%がクリスチャンだったとすると、25人程は永遠の生命の約束を受けているという計算が成り立つ。それは同時に、あとの2475人は滅びに向かっている可能性があるということだ。イエスはその人たちを見て、あわれんでおられないだろうか。現状では、主を知らない人たちが地に満ちていて、順番に滅んでいくのを待っている状態である。「われにスコットランドを与えよ。しからずんば死を与えよ」と祈ったジョン・ノックスの祈りと同様の祈りを、神は日本のクリスチャンにも求めておられるのだと思う。数年以内に、千人規模のクモ型教会が新しく10生まれるなら、それは素晴らしいことだ。しかし、ほとんどの人が滅びていくという大局に重大な影響を与えるほどのインパクトはない。細胞分裂のように、幾何級数的な増加が見込まれるヒトデ型教会の増殖なしに、地が主の弟子で満たされるという命令が、国レベルで実行されることを想像することはできない。このような増殖は、会堂を教会員で満たすのではなく、地を主の弟子で満たすという「イデオロギー」によって推進される。

4) 海外邦人と在日外国人のネットワーク

ヒトデ型教会の拡大のために土台となりうる既存のネットワークとして、少なくとも2つのネットワークが考えられる。1つは、現代のディアスポラとも称される海外邦人である。日本人は強大な経済力を背景に、世界のあらゆる所に進出している。世間のネットワークから引き離されて自由になった一方、アイデンティティの危機を経験するようになった海外の日本人が、キリスト教に対してオープンになり、日常生活レベルのクリスチャンの支援を受けて、回心に導かれるというシナリオがある。また、彼らの流動性のゆえ

¹¹ RAC ネットワークのウェブサイトでは、Life Transformation Group と Marriage Transformation Group という2つのアカウントビリティグループを紹介している。福田充男「LTG (ライフ・トランスフォーメーション・グループ)」、2004、http://homepage3.nifty.com/rac/aco_ltg_top.html、福田充男「MTG (マリッジ・トランスフォーメーション・グループ)」、2004、http://homepage3.nifty.com/rac/aco_mtg_01.html

に教職者が派遣されにくいという状況が、日常生活に根付いた相互扶助のネットワークの形成を促進している。離散ユダヤ人が、初代教会の福音伝搬のために用いられたように、海外邦人と帰国者が、日本人による世界宣教の担い手となる可能性がある。同様のことは、日本在住の外国人ビジネスパーソンと家族、また外国人留学生にも当てはまる。これらのコミュニティをターゲットとする働きが実を結ぶならば、日本国内に軸足を置いて世界宣教を展開することができる。

5) 5つの機能のバランスがムーブメントを推進させる

教師機能が支配的な教会では、人々は絶えず目新しい情報を教師に求めて依存する。牧師機能が支配的な教会は、時々現われては消えていく。人々はいやしを求めて教会に集まるが、一時的に殺到するために、スタッフが対応できずに燃え尽きることが多いからだ。伝道者機能が支配的な教会では、未信者を魅了する「ショー」を通して回心者が起こされるが、新しいクリスチャンを育成するための挑戦は不得手で、常に人々を回心に導くための、いわば初歩的な教えが反復される¹²。預言者機能が支配的な教会は、直感的な印象に振り回されて迷走する。いつも大逆転狙いで地道な努力が報われない。使徒機能が支配的な教会は、中途半端な結果しか残せない。新しい計画が実行する前に、次の計画を立てようとするからだ。どの機能も神から与えられたものだが、支配的になってはならない。バランスよく組み合わせられて、相補的に機能する必要がある。

日本の多くの地域教会は教師機能が強く、超教派団体は伝道者機能が強いと思われる。牧師機能が強い教会や預言者機能が強い教会が、海外のブームが波及する形でときどき注目されるが、使徒機能が強い教会は空回りしていてアイデア倒れになっている。問題は、それぞれの持ち味を持った教会が、バラバラに展開していることだ。これらの五つの機能が結びつくのは、使徒

機能と預言者機能という土台の上でしかない(エペソ2:20)。すなわち、地をキリストの弟子で満たすというビジョンと戦略が、神の導きに従って展開していく。その基本路線に沿って、大胆に福音を伝え、神との関係や人々との関係を修正し、聖書に照らして進展プロセスを検証しながら、働きが進んでいくのである。

V. 分散型社会におけるヒトデ型教会の役割

「ウェブから無償のIP電話ソフトをダウンロードし、パソコンにインストールするだけで、世界中のSkypeユーザーと無料で音声通話を楽しめるし、条件によってはビデオチャットもできる」と、従来の電話に慣れている年配の方々に説明するのは難しい。それと同じように、NTTにたとえられる集権型のクモ型教会が、スカイプにたとえられる分散型のヒトデ型教会を理解するのは容易ではない。しかし、本論では、クモ型教会よりも、むしろヒトデ型教会の方が、ステパノの迫害以降の初代教会の特質と共通項が多いし、ヒトデ型教会の拡大が現在の閉塞感を克服する道の一つだと論じてきた。それでは、クモ型教会はヒトデ型教会に切り替わるべきだろうか。

クモ型教会のヒトデ型教会への対応には、3つのタイプがあると考えられる。第1に迫害、第2に棲み分け、第3に支援である。クモ型教会がヒトデ型教会に変わるのはハードルが高いし、変わるとしても長い時間がかかる。もちろん例外はあるが、一般的には、あえてそれに挑戦するよりも、第3の「ヒトデ型教会を支援する道」を選ぶ方が現実的だと思う。ヒトデ型教会を支配することはできないが、クモ型教会が蓄積してきた神学的研さんや歴史的教訓などのリソースを、シンプルに要約してヒトデ型教会に提供することにより、新しいムーブメントの拡大を助けることができる。クモ型教会は、ヒトデ型教会の5つの足のどれかを、現在の集権型組織の中に取り入れることにより、組織を活性化したり外向きにしたりすることができる。争ったり無視したりしないで、互いの特徴を認めて学びあい、支えあう道を模索することが、神の国の拡大のために必要である。

ただ、クモ型教会が、「ヒトデ型教会も、時が経つにつれてクモ型教会に

¹² ジムソンは、教師、伝道者、牧師がそれぞれ単独で教会を建てた場合に想定されること列挙し、キリストのからだの中で、5つの機能のうちの1つの機能だけが突出することを避けるべきだと論じている。Wolfgang Simson, *Houses That Change the World*. (Carlisle, UK: OM Publishing, 2001) pp.116-120.

変化する」という前提を持ち、先輩としてヒトデ型教会に指導や警告を与えよう、という態度で接するならば、ヒトデ型教会の分散型社会における特別な役割を見失ってしまう恐れがある。初代教会も歴史上の宣教ムーブメントの多くも、初めは分散型だが、次第に制度化されて、中央集権型の教団に段階的に変化していくという経緯をたどった。教会の制度化を、カリスマリーダーの主導する萌芽期から組織化段階（セクト）、最大効率の段階（デノミネーション）、制度的段階（チャーチ）を経て、解体期へと進んでいくライフサイクルだと理解したり¹³、あるいは、霊的主観的パラダイムと人為方策的パラダイムの両極を行き来する振り子の一方の振り幅だと捉えたりする人たちがいる¹⁴。人々が神の国ではなく人間の帝国を求めようになったときに、教会は内向きになり、ムーブメントは終焉した。

ところが、本論で紹介したヒトデ型組織には、これらのタイポロジーでは分析できない側面がある。それは、現代社会の構造そのものが分散型になっているという点だ。現代人は、歴史上人類がこれまで1度も経験したことのない分散型ネットワークの文脈に生きている。インターネットとその土台の上に展開する無数のネットワークは、革新的な動きを引き起こしている。たとえば、ブラフマンとベックストロームは、無料のオンライン百科事典の「ウィキペディア」について解説する。ブリタニカ百科事典は、博士号を持つフルタイムの専門家が執筆したり編集したりしている。ところが、ウィキペディアの場合は、ウェブサイトアクセスした一般のユーザーたちが、自由に書き込みをしたり削除したりすることによって編集作業を行なっている。科学雑誌「ネイチャー」の調査によると、ウィキペディアとブリタニカ百科事典の内容は、ほぼ同じぐらい正確なのだそう¹⁵。そうであるなら、この流

れは不可逆的だと思われる。ウェブサイトにアクセスするだけで、無料で、質の高い、正確な記事を見ることができれば、図書館に向いて分厚い百科事典をめくる人が激減するのは当然だ。ヒトデ型組織の4本目の足である既存のネットワークは、インターネット上に溢れている。社会構造そのものが分散化していることが、それに対応する分散型組織の有効性と継続性を担保している。

社会構造が分散化しているだけでなく、開かれた組織に招かれた人たちの意識が変化し、分散型の文化が定着している。ブラフマンとベックストロームによると、彼らは「自動的にその組織に役に立つことをしたがる」ようだ。たとえば、先ほどのウィキペディアでは、ユーザーが自由に書き込みできるにもかかわらず、無軌道な記事は稀であるばかりか、圧倒的多数の寄稿者は、実際に役に立つ記事を書いている。その中には、専門家も含まれている。そればかりか、ボランティアのウィキペディア警察を名乗るユーザーさえ存在する。ブラフマンとベックストロームは、次のように主張する。「基本的に人間が善良な存在だということは、ウィキペディアが証明している。」¹⁶

インターネットの発達によって、人間の善良さだけでなく、邪悪さまでもが増幅されて表現されている事実を見ると、ブラフマンとベックストロームの「性善説」に全面的に同意することはできない。しかし、もし人間の邪悪さの表現を、分散型社会の中では、十分に管理することができないのだとするなら、究極的には、規則で縛るのではなく、元来人間の心の中に刻まれた規範とも言える良心が機能することに期待するしかない。ウィキペディアに書き込みをするユーザーたちが、客観的で、正確で、わかりやすい記事を書こうと心を砕いていること、また、アルコホリックス・アノニマスの参加者が、秘密を守った上で、互いを支えあおうとしていることは、人間の善良さの証明ではなく、共通の規範に従おうとする意識が存在することの証明である。そこでは、本音で善良に生きるという規範意識を持つ人たちが、相互に信頼して支えあうという分散型の文化が定着している。そういう環境の中

い：21世紀はリーダーなき組織が勝つ』80頁

¹⁶ 前掲書、97-98頁

¹³ Moberg, David O. *The Church as a Social Institution: The Sociology of American Religion*. (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1962) pp. 73-99 参照

¹⁴ クリスチャン・シュヴァルト『自然に成長する教会：健康な教会への8つの不可欠な特質』(JCMN 出版、1999年)83-102頁を参照。原著は、Christian A. Schwarz, *Natural Church Development: A Guide to Eight Essential Qualities of Healthy Churches*. (Emmelsbuehl, Germany: NCD Media, 1996)

¹⁵ オリ・ブラフマンとロッド・A・ベックストローム『ヒトデはクモよりなぜ強

ヒトデ型教会のススメ

では、聖霊によって良心を清められ、喜んで隣人に仕えようとするクリスチャンの生き方が、信頼を勝ち取っていく土壌がある。

ヒトデ型教会は、分散化した社会構造の中で、分散型の文化に生きる人々に対して、神の自己犠牲の愛を証しする「歴史的な役割」を担うのである。

(宣教戦略シンクタンク「RAC ネットワーク」代表)